



0300
#4

PATENT
2185-0514P

IN THE U.S. PATENT AND TRADEMARK OFFICE

Applicant: Tatsuo TATENO et al. Conf.: 5720
Appl. No.: 109/783,031 Group: Unknown
Filed: February 15, 2001 Examiner: UNKNOWN
For: PROCESS FOR PRODUCING FATTY ACID ESTERS
AND FUELS COMPRISING FATTY ACID ESTER

L E T T E R

Assistant Commissioner for Patents
Washington, DC 20231

June 11, 2001

Sir:

Under the provisions of 35 U.S.C. § 119 and 37 C.F.R. § 1.55(a), the applicant(s) hereby claim(s) the right of priority based on the following application(s):

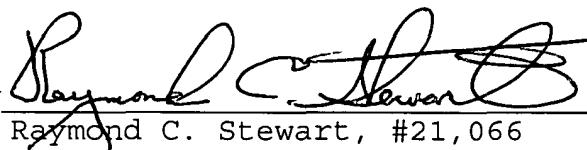
<u>Country</u>	<u>Application No.</u>	<u>Filed</u>
JAPAN	2000-039316	February 17, 2000
JAPAN	2000-039318	February 17, 2000

A certified copy of the above-noted application(s) is(are) attached hereto.

If necessary, the Commissioner is hereby authorized in this, concurrent, and future replies, to charge payment or credit any overpayment to Deposit Account No. 02-2448 for any additional fee required under 37 C.F.R. §§ 1.16 or 1.17; particularly, extension of time fees.

Respectfully submitted,

BIRCH, STEWART, KOLASCH & BIRCH, LLP

By 
Raymond C. Stewart, #21,066

P.O. Box 747
Falls Church, VA 22040-0747
(703) 205-8000

RCS/JWH/sh
2185-0514P

Attachment



19100512
09/783,031 #4
Filed 2/15/01
Birch, Stewart, Kolasch & Birch
Att (703) 305-8600
2185-514A

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日
Date of Application: 2000年 2月17日

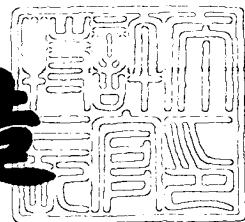
出願番号 Application Number: 特願2000-039318

出願人
Applicant(s): 住友化学工業株式会社

2000年12月 1日

特許庁長官
Commissioner,
Patent Office

及川耕造



出証番号 出証特2000-3098836

【書類名】 特許願
 【整理番号】 P151266
 【提出日】 平成12年 2月17日
 【あて先】 特許庁長官殿
 【国際特許分類】 C10M109/02
 C08L 91/00
 C11C 1/00
 C07C 69/02

【発明者】

【住所又は居所】 茨城県つくば市北原6 住友化学工業株式会社内
 【氏名】 館野 辰男

【発明者】

【住所又は居所】 茨城県つくば市北原6 住友化学工業株式会社内
 【氏名】 佐々木 俊夫

【特許出願人】

【識別番号】 000002093
 【氏名又は名称】 住友化学工業株式会社
 【代表者】 香西 昭夫

【代理人】

【識別番号】 100093285
 【弁理士】
 【氏名又は名称】 久保山 隆
 【電話番号】 06-6220-3404

【選任した代理人】

【識別番号】 100094477
 【弁理士】
 【氏名又は名称】 神野 直美
 【電話番号】 06-6220-3404

【選任した代理人】

【識別番号】 100113000

【弁理士】

【氏名又は名称】 中山 亨

【電話番号】 06-6220-3404

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 010238

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9903380

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 脂肪酸エステルの製造方法及び脂肪酸エステルを含む燃料

【特許請求の範囲】

【請求項1】油脂とアルコールから脂肪酸エステルを製造する方法において、ニッケル含有固体触媒を添加して、油脂および／またはアルコールが超臨界状態になる条件で反応させることを特徴とする脂肪酸エステルとグリセリンの製造方法。

【請求項2】ニッケル含有固体触媒が、ニッケル酸化物を含む触媒である請求項1記載の脂肪酸エステルとグリセリンの製造方法。

【請求項3】アルコールが超臨界状態になる条件で反応させることを特徴とする請求項1記載の脂肪酸エステルとグリセリンの製造方法。

【請求項4】アルコールが、下記一般式(1)で示されるものである請求項3記載の脂肪酸エステルとグリセリンの製造方法。

【化1】



(Rは炭素数1から10のヒドロカルビル基、または炭素数2から10の、ヒドロカルビロキシル基で置換されたヒドロカルビル基を示す。)

【請求項5】一般式(1)のRが炭素数1～4のアルキル基である請求項4記載の脂肪酸エステルとグリセリンの製造方法。

【請求項6】一般式(1)のRがメチル基またはエチル基である請求項5記載の脂肪酸エステルとグリセリンの製造方法。

【請求項7】一般式(1)のRがメチル基である請求項6記載の脂肪酸エステルとグリセリンの製造方法。

【請求項8】油脂が廃油脂である請求項1～7のいずれかに記載の脂肪酸エステルとグリセリンの製造方法。

【請求項9】油脂が廃食用油である請求項1～7のいずれかに記載の脂肪酸エステルとグリセリンの製造方法。

【請求項10】請求項1～9のいずれかに記載の製造方法により製造された脂肪酸エステルを含む燃料。

【請求項11】請求項1～9のいずれかに記載の製造方法により製造された脂肪酸エステルを含むディーゼル燃料。

【請求項12】請求項1～9のいずれかに記載の製造方法により製造された脂肪酸エステルを含む潤滑油基油。

【請求項13】請求項1～9のいずれかに記載の製造方法により製造された脂肪酸エステルを含む燃料油添加剤。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は油脂とアルコールを反応させる脂肪酸エステルとグリセリンの製造方法および該製造方法により得られる脂肪酸エステルを含む燃料に関する。

【0002】

【従来の技術】

油脂は、トリグリセリドと呼ばれる脂肪酸とグリセリンのエステルが主成分であり、油脂とアルコールを用いたエステル交換処理により得られる脂肪酸エステルは、工業原料や医薬品等に広く用いられている。

【0003】

油脂をアルコールと反応させてエステル交換することにより、従来の鉱物油にかわる、脂肪酸エステルを含むディーゼル燃料や潤滑油基油を製造する方法が報告されている。例えば、特開平9-235573号公報および特開平7-197047号公報では、苛性ソーダの存在下で廃食用油とメタノールを反応させてディーゼル燃料を製造している。特開平07-197047号公報には、エステル交換反応は、通常苛性ソーダなどのアルカリ触媒を用いて大気圧下、50℃から70℃の温度で行なうことが記載されている。この場合、原料油脂中に遊離脂肪酸が存在するとアルカリ触媒と反応して石鹼が生成するため前処理が不可欠である上に、前処理してもエステル交換反応過程で少量の石鹼が生成するため、後処理で分離する必要がある。

一方、このエステル交換反応を9～10MPa、220～250℃の条件下で行なうと、遊離脂肪酸を含有した低純度の油脂原料を用いることができるこことも知

られている〔ウルマンズ エンサイクロペディア オブ インダストリアル ケミストリー 第5完全改訂版 (Ullmann's Encyclopedia of Industrial Chemistry Fifth Completely Revised Edition) 〕、第A10巻 (1987年)、第281頁)。

【0004】

また、米国特許第5713965号明細書には、ヘキサン溶媒中、リバーゼの存在下で油脂とアルコールから脂肪酸エステルを含むディーゼル燃料および潤滑油を製造する手法が開示されている。加圧下で触媒を添加して油脂とアルコールから脂肪酸エステルの製造を行う例も知られている〔ウルマン エンザイクロペディー デア テクニッشن ヘミー (Ullmann Enzyklopädie der Technischen Chemie)、第4版、第11巻 (1976年)、第432頁)〕。すなわち、10MPa、240°C、7~8倍過剰のメタノールの条件下、アルカリ触媒もしくは亜鉛触媒を用いて反応を行っている。

油脂とアルコールとをアルカリ触媒共存下、240°C、9MPa (90bar) で連続反応させて脂肪酸エステルを製造する技術 [ジャーナル オブ ザ アメリカン オイル ケミツツ ソサエティー (Journal of the American Oil Chemists' Society)、第61巻n o. 2 (1984年)] も知られているが、アルカリ触媒の詳細は明らかではない。

また、不均一固体触媒として炭酸ナトリウムや炭酸水素ナトリウムを使用して、常圧または常圧に近い条件下、使用アルコールの沸点またはそれに近い温度で反応させる方法が提案されている (特開昭61-254255号公報) が、反応が緩慢であり生産性が不充分である。

油脂とアルコールとをZnO、またはZnとAlの複合酸化物触媒下、170~250°Cの範囲、10MPa (100bar) 以下で反応させて脂肪酸エステルを製造する技術 (米国特許第5908946号明細書) も知られているが、同様に反応が緩慢である。

さらに、アルカリ土類金属酸化物を含む固体触媒などを用いて、25～260℃の範囲、0.1MPa(1atm)から10.1MPa(100atm)の圧力下で、油脂とアルコールを反応させて選択的にモノグリセリドを製造する方法（スペイン特許第2124166号明細書）が提案されているが、脂肪酸アルキルエステルとグリセリンを製造する方法は開示されていない。

【0005】

【発明が解決しようとする課題】

本発明の目的は、油脂とアルコールから、より適切な条件で効率的に高収率で脂肪酸エステルとグリセリンを製造する方法および該脂肪酸エステルを含む燃料等を提供することにある。

【0006】

【課題を解決するための手段】

本発明者らは、油脂とアルコールを反応させて脂肪酸エステルとグリセリンを製造する方法および脂肪酸エステルを含む燃料について銳意研究を続け、ニッケル化合物含有固体触媒を添加して、油脂および／またはアルコールが超臨界状態になる条件で反応を行えば、高収率で反応が進行することを見出し、本発明を完成するに至った。即ち本発明は、下記〔1〕～〔5〕の発明を提供する。

〔1〕油脂とアルコールから脂肪酸エステルとグリセリンを製造する方法において、ニッケル含有固体触媒を添加して、油脂および／またはアルコールが超臨界状態になる条件で反応させることを特徴とする脂肪酸エステルとグリセリンの製造方法。

〔2〕上記〔1〕記載の製造方法により製造された脂肪酸エステルとグリセリンを含む燃料。

〔3〕上記〔1〕記載の製造方法により製造された脂肪酸エステルとグリセリンを含むディーゼル燃料。

〔4〕上記〔1〕記載の製造方法により製造された脂肪酸エステルとグリセリンを含む潤滑油基油。

〔5〕上記〔1〕記載の製造方法により製造された脂肪酸エステルとグリセリンを含む燃料油添加剤。

【0007】

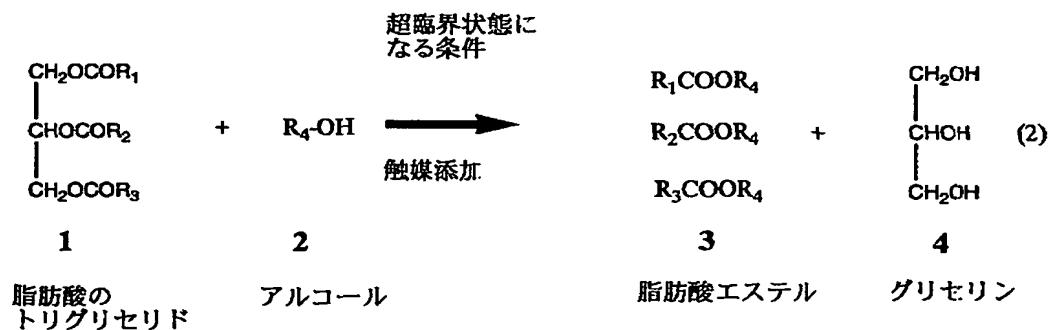
【発明の実施の形態】

以下、本発明について詳細に説明する。

本発明の製造方法の主反応は、次の反応式(2)で示される。

【0008】

【化2】



【0009】

(式中、 R_1 、 R_2 、 R_3 は互いに独立に、脂肪酸の炭素鎖を示す。 R_1 ～ R_3 の炭素数は油脂の種類によって異なる。 R_4 はヒドロカルビロキシル基で置換されてもよいヒドロカルビル基を示す)

本発明で用いる油脂は、脂肪酸とグリセリンのエステルであるトリグリセリドを主体とするものである。ここに「トリグリセリドを主体とする」とは、トリグリセリドが油脂の50重量%以上含有されていることを意味する。

【0010】

本発明で使用する油脂は、反応式(2)に示される脂肪酸のトリグリセリド1を主として含む物質であり、天然油脂でも合成油脂でも良い。

油脂には、代表的なものとして、ラード脂、ニワトリ脂、バター脂、牛脂、ココアバター脂、トウモロコシ油、ラッカセイ油、棉実油、ダイズ油、ヤシ油、オリーブ油、サフラワー油、アマニ油、ココナッツ油、カシ油、アーモンド油、アンズの仁油、牛骨脂、クログルミ油、ヒマシ油、大風子油、シナ脂、タラ肝油、綿実ステアリン、ゴマ油、鹿脂、イルカ脂、イワシ油、サバ油、馬脂、豚脂、骨油、アマニ油、羊脂、牛脚油、パーム油、パーム核油、ネズミイルカ油、サメ油

、マッコウクジラ油、桐油、鯨油などがあげられるが、これらには限定されない。また、これらの油脂が複数混合したもの、ジグリセリドやモノグリセリドを含む油脂、一部、酸化、還元等の変性を起こした油脂でもよい。また、未精製の油脂で、遊離脂肪酸や水分などを含有するものでもよいし、レストラン、食品工場、一般家庭などから廃棄される廃食油でもよいが、必要に応じて適切な前処理を行なうことが好ましい。

例えば、本発明を廃食油などの廃油に適用する際に、不溶解性の固体が油脂に混入すると昇圧ポンプや圧力調節弁の閉塞をおこし、安定運転の妨げになる場合があるので予熱器に供給する前に金網、フィルター等で油脂から不溶解性の固体を取り除くことが好ましい。

【0011】

油脂中には油脂以外の成分が混入していてもよい。具体的には、原油、重油、軽油、鉱物油、精油、石炭、脂肪酸、糖類、金属粉、金属塩、蛋白質、アミノ酸、炭化水素、コレステロール、フレーバー、色素化合物、酵素、香料、アルコール、纖維、樹脂、ゴム、塗料、セメント、洗剤、芳香族化合物、脂肪族化合物、スス、ガラス、土砂、含窒素化合物、含硫黄化合物、含リン化合物、含ハロゲン化合物などがあげられるが、これには限定されない。

【0012】

油脂中に含まれる上述の物質は、反応に関与する可能性がある場合、例えば、反応を阻害する可能性がある場合、固体であり製造プロセスで閉塞の可能性がある場合等には、反応前にろ過、蒸留等の手法を用いて取り除いておくのが好ましい。

蒸留の方法としては、減圧蒸留、水蒸気蒸留、分子蒸留、抽出蒸留などがあげられるが、これには限定されない。

本発明において、油脂としては、廃油脂、あるいは廃食用油等も使用可能である。

【0013】

本発明で使用するアルコール（反応式（2）の 2 ）は特に限定されないが、一般式

【化3】

R-OH (1)

(Rは炭素数1から10のヒドロカルビル基、または炭素数2から10の、ヒドロカルビロキシル基で置換されたヒドロカルビル基を示す。)で示されるアルコールが好ましい。

【0014】

Rのうち炭素数1から10のヒドロカルビル基としては、例えば、アルキル基、アラルキル基、アルケニル基、アルキニル基などがあげられる。

【0015】

Rがアルキル基であるアルコールとしては、メタノール、エタノール、n-ブロパノール、イソブロパノール、n-ブタノール、イソブタノール、t-ブタノール、ペンタノール、ヘキサノール、シクロヘキサノール、ヘプタノールなどが例示される。

【0016】

Rがアラルキル基であるアルコールとしてはベンジルアルコール、 α -フェニチルアルコール、 β -フェニチルアルコールが例示され、ベンジルアルコールが好ましい。

【0017】

Rがアルケニル基であるアルコールとしては、アリルアルコール、1-メチルアリルアルコール、2-メチルアリルアルコール、3-ブテン-1-オール、3-ブテン-2-オールなどが例示され、アリルアルコールが好ましい。

【0018】

Rがアルキニル基であるアルコールとしては、2-プロピン-1-オール、2-ブチン-1-オール、3-ブチン-1-オール、3-ブチン-2-オールなどが例示される。

【0019】

Rが炭素数2から10の、ヒドロカルビロキシル基で置換されたヒドロカルビル基であるアルコールとしては、2-メトキシエタノール、2-メトキシプロパノール、3-メトキシブタノールなどが例示される。

【0020】

この中で、アルコールとしては、Rが炭素数1から4のアルキル基であることが好ましい。具体的には、Rがメチル基であるメタノール、Rがエチル基であるエタノール、Rがプロピル基であるプロパノール、Rがイソプロピル基であるイソプロパノール、Rがn-ブチル基であるn-ブタノール、Rがイソブチル基であるイソブタノール、Rがt-ブチル基であるt-ブタノールが好ましく、より好ましくはメタノール、エタノールであり、さらに好ましくはメタノールである。アルコールの純度としては特に限定されないが、好ましくは95%以上、より好ましくは98%以上である。アルコールは1種類を用いてもよいし、2種以上を混合して用いてもよい。

また、アルコールは、光学異性体が存在する場合には、光学異性体も含む。

【0021】

アルコールの供給重量は、下式に従って算出したアルコールの理論供給重量の1~100倍であることが好ましい。

【0022】

【数1】

アルコールの理論供給重量 =

(油脂の供給重量 × 油脂のケン化価 × アルコールの分子量) ÷ 56100

【0023】

(ここで、油脂のケン化価とは、油脂1gを完全にケン化するために必要な水酸化カリウムの量をmg数で表した値である)

該比が1よりも小さい場合には、反応収率が低下するため好ましくなく、また該比が100よりも大きい場合には、装置が大型化し過ぎる場合があり好ましくない。

【0024】

式(2)の反応で製造される脂肪酸エステル3には、代表的なものとして、吉草酸、カプロン酸、エナトン酸、カブリル酸、ペラルゴン酸、カブリン酸、ウンデシル酸、ラウリン酸、トリデシル酸、ミリスチン酸、ペンタデシル酸、パルミチン酸、ヘプテデシル酸、ステアリン酸、ノナデカン酸、アラキン酸、ペペ

ン酸、リグノセリン酸、セロチン酸、ヘプタコサン酸、モンタン酸、メリシン酸、ラクセル酸、クロトン酸、イソクロトン酸、ウンデシレン酸、オレイン酸、エライジン酸、セトレイン酸、エルカ酸、ブラシジン酸、ソルビン酸、リノール酸、リノレン酸、アラキドン酸、プロピオール酸、ステアロール酸、ネルボン酸、リシノール酸、(+) -ヒドノカルビン酸、(+) -チャウルムーグリン酸などのエステルがあげられるが、これには限定されない。エステルのアルコール残基は、使用したアルコールにより決まる。例えば、アルコールとしてメチルアルコールを使用した場合にはメチルエステル、エチルアルコールを使用した場合には、エチルエステルが得られる。

また、脂肪酸残基に光学異性体が存在する場合には、光学異性体も含む。

また、本製造方法においては、脂肪酸エステルの他に主生成物として、グリセリン 4 が生成する。

【0025】

次に、本発明で用いる触媒について説明する。

本発明に用いる触媒は、ニッケル化合物を含有する固体触媒である。例えば、ニッケル酸化物 (NiO、Ni₂O₃、NiOとNi₂O₃の複合酸化物)、炭酸ニッケル、水酸化ニッケル、塩基性炭酸ニッケルなどを含有する固体触媒、さらにシリカ、ゼオライトなどの担体にニッケル化合物を含浸処理した固体触媒などがあげられる。好ましくは、ニッケル酸化物を含有する固体触媒である。

また、触媒の使用量は、油脂 100 重量部に対して 0.01 重量部から 6 重量部が好ましく、さらに 0.1 重量部から 3 重量部がより好ましい。

【0026】

本発明でいう超臨界状態とは次の状態をいう。

物質には、固有の気体、液体、固体の三態があり、さらに、臨界温度以上になると、圧力をかけても凝縮しない流体相がある。この状態を超臨界状態という。

超臨界状態にある流体は液体や気体の通常の性質と異なる性質を示す。超臨界状態の流体の密度は液体に近く、粘度は気体に近く、熱伝導率と拡散係数は気体と液体の中間的性質を示す、“液体ではない溶媒”であり、低粘性、高拡散性のために物質移動が有利となり、また高伝熱性のために高い熱移動性を得ることが

できる。このような特殊な状態であるため、超臨界状態では、通常の気相液相状態よりも反応性が高くなり、エステル交換反応がより促進される。

【0027】

「油脂および／またはアルコールが超臨界状態になる条件」とは、以下に示す、(a) - (c) の条件を含む。

(a) 油脂とアルコールの混合物が超臨界状態になる温度条件。

(b) アルコールが超臨界状態になる温度条件。

(c) 油脂が超臨界状態になる温度条件。

上記のうち (a) または (b) の条件で反応を行うことが好ましい。

【0028】

(b) の条件としては具体的には、アルコールとしてメタノールを使用する場合には、メタノールの臨界温度は240℃なので、温度240℃以上で反応を行う。また、エタノールを使用する場合にはエタノールの臨界温度は243℃なので、温度243℃以上で反応を行う。プロパノールの場合には、臨界温度は264℃なので、温度264℃以上で反応を行う。ブタノールを使用する場合には、臨界温度は287℃なので温度287℃以上で反応を行う。イソプロパノールを使用する場合には、臨界温度は236℃なので温度236℃以上で反応を行う。イソブタノールを使用する場合には、臨界温度は275℃なので温度275℃以上で反応を行う。t-ブタノールを使用する場合には、臨界温度は233℃なので温度233℃以上で反応を行う。

反応温度の上限は限定的ではないが、分解反応などが起こる場合があり、好ましくは400℃以下である。

【0029】

本発明の油脂とアルコールを反応させる反応容器内のアルコール密度条件は、限定的ではないが、0.01g/cm³から0.4g/cm³の範囲が好ましく、圧力条件としては、0.5MPaから25MPaの範囲であることが好ましい。

【0030】

また本発明の油脂とアルコールを反応させる時間は、0.1分から180分の範囲であることが好ましく、0.5分から120分の範囲がより好ましい。さら

に好ましくは、1分から60分の範囲である。

【0031】

本反応は種々の反応態様で実施できる。たとえば、バッチ方式で行っても良いし、流通方式で行っても良い。

また、本発明において、油脂とアルコールは、反応中、均一に混合していても良いし、反応できる状態にある限り、二層に分離していてもよい。

二層に分離している場合には、例えば、攪拌下反応を行うことにより二層の接触面積を大きくすることにより、反応をさらに効率よく進めることができる。

【0032】

反応終了後の反応混合物は、脂肪酸エステル、グリセリン、過剰の未反応アルコールを含み、さらに未反応の原料、その他の不純物を含むこともある。

この反応混合物から、それぞれの用途に必要な純度まで、脂肪酸エステルを精製する。精製の方法は、特に限定されず、製造される脂肪酸エステルの性質に応じて、蒸留、抽出等一般的な方法が適用できる。

例えばアルコールとしてメタノールを用いた場合で説明すると、過剰（または未反応）メタノール成分を気化させて分離回収した後、静置して軽液と重液に分離する。本発明に使用する触媒は、苛性ソーダ触媒などと比較して反応液との分離が比較的容易であり、反応液の後処理が簡便である。軽液は脂肪酸のメチルエステルが主成分であり、ディーゼル燃料用の原料や天然高級アルコール用の原料として利用することができる。また、グリセリン主成分の重液は、工業用グリセリンの原料として利用することができる。

未反応のアルコールの分離には、減圧蒸留等の蒸留の他にも代表的なものとしてミキサーセトラー式抽出、液液抽出、パルスコラムを用いた抽出、ジェット式抽出、ボドビエルニアク回転抽出などがあげられるが、これには限定されない。また、アルコールを完全に分離して、脂肪酸エステルのみを取り出してもよいし、アルコールが残留している状態で回収してもよい。

【0033】

本発明の方法で製造される脂肪酸エステルは、原料の油脂の構造によるが、天然油脂を使用する場合は、一般に数種の脂肪酸エステルの混合物になる。この場

合には、用途に応じ、混合物のままで使用することもできるし、必要に応じて特定の脂肪酸エステルのみを蒸留、抽出等の一般的な方法で分離して使用することができる。

【0034】

上記のようにして製造した脂肪酸エステルは、ディーゼル燃料などの燃料、潤滑油基油、燃料油添加剤等にその用途の要求に応じて、単独で、あるいは、他の成分と混合して使用することができる。

【0035】

新編自動車工学ハンドブック（社団法人 自動車技術会編）によると、ディーゼル燃料として用いる場合には、着火性、粘度が重要になる。比較的低粘度の脂肪酸エステルを用いると摩耗や焼き付けの原因となるため、ディーゼル機関に適合した粘度の脂肪酸エステルを用いる必要がある。また、分子量が高すぎると臭気や排煙の原因となるので、そのような脂肪酸エステルは好ましくない。

例えば、脂肪酸メチルエステル、脂肪酸エチルエステル、脂肪酸イソプロピルエステル、脂肪酸イソブチルエステル等がディーゼル燃料として好ましく用いられる。このなかで脂肪酸イソプロピルエステル、脂肪酸イソブチルエステルは低温時において特性の高いディーゼル燃料となる。

潤滑油基油として用いる場合にも、粘度が重要になる。夏季用としては高い潤滑性を出すために比較的高粘度であることが望まれるが、冬期や低温の場所で使用する場合には比較的低粘度、高流動性の脂肪酸エステルが望まれる。そのため、幅広い範囲の脂肪酸エステルが潤滑油基油として使用できる。

燃料油添加剤としては、主として摩擦を少なくする目的で脂肪酸エステルを燃料に添加する。潤滑油とほぼ同じ役割をしており、潤滑油基油と同様の性質が望まれる。

【0036】

製造した脂肪酸エステルは、用途により、使用上問題なければ、その範囲において、反応終了後の反応混合物に含まれるグリセリン、過剰の未反応アルコール、さらに未反応の油脂、その他の不純物を含んでいても良い。

また、用途の必要に応じ、本発明の各条件下において、反応を繰り返す等によ

り、さらに収率を向上させることが出来る。

【0037】

【実施例】

以下、実施例によって本発明をさらに詳細に説明するが、本発明はこれらに限定されるものではない。

【0038】

実施例1

トリグリセリドを主体とする油脂として大豆油0.861g、アルコールとしてメタノール1.242g、触媒としてニッケル酸化物(NiOとNi₂O₃の複合酸化物)粉末10.9mgを秤量して、ステンレス製反応管(約4.5cm³)に充填し密閉した。この反応管を、300℃に温度制御した流動層サンドバス中に投入して昇温・反応させた後、10分後に取り出して直ちに水中投入して冷却した。この反応に使用したメタノール量は、大豆油を完全にメチルエステル化するのに必要な理論量の約13倍であった。また反応管壁に熱電対を設置して温度測定したところ、2分後で約260℃となりメタノールの臨界温度を超えていた。また、反応容積から計算した反応初期のメタノール密度は約0.28g/cm³であった。

次に、反応管中の反応液を一次回収後、メタノール洗浄を3回繰り返して回収したところ、使用した触媒は回収液中で沈降分離していた。この回収液中のメチルエステル成分とグリセリン成分をガスクロマトグラフィーにより定量分析し反応性を評価したところ、メチルエステル収率は約98%、グリセリン収率は約91%であった。ここで収率とは、大豆油1モルに対してメチルエステルが3モル、グリセリンが1モル生成する反応を基準として計算した値である。

【0039】

実施例2

大豆油0.867g、メタノール1.241g、ニッケル酸化物粉末29.1mgとした以外は、実施例1と同様にして試験した。この回収液の分析の結果、メチルエステル収率は約98%、グリセリン収率は約91%であった。

【0040】

比較例1

大豆油0.858g、メタノール1.239g、酸化亜鉛(ZnO)粉末10.2mgとした以外は、実施例1と同様にして試験した。この回収液の分析の結果、メチルエステルの収率は約58%、グリセリン収率は約30%であった。

【0041】

【発明の効果】

本発明によれば、油脂とアルコールから、簡便な方法で、高収率で脂肪酸エステルを製造する方法および該脂肪酸エステルを含む燃料等を提供することができ、その工業的価値は大きい。また資源の再利用、公害防止の観点から有用である。

【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 油脂とアルコールから、より適切な条件で効率的に高収率で脂肪酸エステルとグリセリンを製造する方法および該脂肪酸エステルを含む燃料

【解決手段】 油脂とアルコールから脂肪酸エステルとグリセリンを製造する方法において、ニッケル含有固体触媒を添加して、油脂および／またはアルコールが超臨界状態になる条件で反応させることを特徴とする脂肪酸エステルとグリセリンの製造方法、および、その製造方法により製造された脂肪酸エステルを含む、燃料、ディーゼル燃料、潤滑油基油もしくは燃料油添加剤。

【選択図】 なし

出願人履歴情報

識別番号 [000002093]

1. 変更年月日 1990年 8月28日

[変更理由] 新規登録

住 所 大阪府大阪市中央区北浜4丁目5番33号
氏 名 住友化学工業株式会社